

何処かから ここへ

奥脇 嵩大(青森県立美術館学芸員)

「全て動物は、世界の内にちょうど水の中に水があるように存在している。」
—ジョルジュ・バタイユ『宗教の理論』¹

「水の中に水がある」。それは自他が内在化した状態を指す。動物に自己と他者を隔てる壁は存在せず、自己と世界を等質化し、交差させることで、生の全体性を獲得する。この至言を基に「動物」を「機械」と言い換えてみる。即ち「全て機械は、世界の内に水の中に水があるように存在している」。國府理の作品が顕わにしつつあったのは、恐らくそうした機械と、世界の姿であった。

本稿では作品の中から特に《風の庭》(2012)²、《Endless Rain》(2014)³を取り上げ、震災直後の2012年から2014年という時間を縦軸に、國府の制作思考の軸を横軸として論じることを試みる。この二軸を基に編まれた目の間から、國府作品が顕そうとした(あるいは既に顕れていた)世界の原理について考えたい。それは人と機械と自然を連ねる営みの環を紡ぎ直すことでもある。

國府理作品の特徴に想像力と設計思想の共存、詩情を湛えつつ実際に可動する機械である点が挙げられる。機械は人が自身の身体機能を拡張し、周囲の環境からエネルギーを取り出すためにつくられる。機械とは人と自然をつなぐ技術である。同時に機械は人の欲望の鏡であり、人と自然の営みの環を崩し、当人たちにもコントロール不能な超自然エネルギーを取り出すことにつながることもある。「2011年3月11日」。それは人とエネルギーをめぐる非対称的な関係を可視化し、再考することを強く促すものであった。

70年代のスーパークー・ブームに幼少期を過ごした國府の機械への志向は、舟に樹木を載せてつくられた《舟島》(2002)の頃を境に変化し始める。機械がひらく環境や風景への関心が前景化されてくるのだ。そうした延長線上に位置するであろう《風の庭》は、パラボラアンテナ型の立体作品とその上に吊るされた照明、建物屋上に建てた風車を組み合わせた作品である。風車が回ると照明に明りが灯る。パラボラアンテナに入れられた土には肥料とシロツメクサの種が蒔かれ、定期的に水をやることで植物が育つ。しかし植物の生育する様子は照明の光の下であまりにか細く、弱々しい。作品は私たちに人間の管理による生態系の孕む危うさや儚さを否応なく想起させる。それは原子力という生態圏外部の超自然エネルギーを生態圏内部に入れ込み、辛くも成立している現在のエネルギーや社会構造と相似形をなすかのようでもある。⁴

《風の庭》の2年後に制作されたのが《Endless Rain》である。本作は稼働するエンジンを冷やすための水が車内に絶えず降り注ぐ。水は新しいものにも変わることなくそのまま循環する。そのことはエネ

ルギーが世界の中で循環し、機械を通じて私たちに還ってくるものであることを暗示するようだ。作品の中で人と機械と自然は互いが交差する構造を示す。つまり3者が互いの媒介として機能する。そして本作はエネルギーが人・機械・自然間に浸透し、3者それぞれが分かれつつ、統合された生態圏的状态で存在し得ることを鮮やかに描出する。こうした世界が見えた時。それは、私たちが國府理の作品をつうじて、世界の「在るがまま」の姿を発見することなのだろう。

國府の機械たちは《風の庭》時点では人と自然の間で、どこことなく居心地が悪そうに機能していたように見えた。⁵しかし彼らは《Endless Rain》において、人と自然の間で循環するエネルギーを導く媒介としての機能を発揮するに至る。こうして世界の内に水の中に水があるように存在できるようになった彼らは、今後一層解像度を増して、人と自然が連なる世界とその行方を照らし出す指標となった筈である。

國府の機械たちは当初「此処ではない何処か」を走り抜けるための道具であった。しかし今の私には國府にとっての「何処か」とは、彼方の地平にあったのではなく、始めから「此処」に顕れていたもののように思われる。この「何処か」とは、鮮明不鮮明の差はあれ、恐らくいつの時代にも等しく顕れることを宿命付けられる類のものなのだろう。

最後に、國府の作品世界を最も雄弁に語るものの一つであろう以下の文章を引用して、この論を終えたい。

私たちの内部で働いている神性と自然の中に働いている神性とは同一不可分のものなのである。それゆえ、もし外界が減んでしまうようなことがあっても、私たちのうちの誰かがその外界をふたたびつくりあげることができるだろう。山や川、木や葉、根や花など、自然界のあらゆる形成物は私たちの内部にあらかじめ形成されて存在し、私たちの魂に由来するからである。その魂の本質は永遠の生命であり、その本質を私たちは感じとれないけれど、たいていの場合、愛の力、および創造の力として感じられるものである。

—ヘルマン・ヘッセ『庭仕事の愉しみ』⁶

1. ジョルジュ・バタイユ(湯浅博雄訳)『宗教の理論』ちくま学芸文庫、2002、23頁 等
2. 『ここから 何処かへ 國府理』2012年7月28日-9月9日、京都芸術センター
3. 『國府理展 相対温室』2014年4月26日-6月22日、国際芸術センター青森 ※4月30日以降公開中止。
4. 原子力と生態圏の関係構造についての見解は、主に中沢新一「日本の大転換」(集英社新書、2011)に拠る。
5. かつて人類の夢を乗せて動いていた車が必要悪のように扱われる現状を、國府自身恠怩たる思いで見つめていたように思う。
6. ヘルマン・ヘッセ(フォルカー・ミヒエルス編、岡田朝雄訳)『庭仕事の愉しみ』草思社文庫、2011、31頁